

# Research Report

## Research Report

近郊都市・第三の地域

抜粋



**Ferris University,**  
**Haruki Laboratory**

# 地方創生の今

**一旗揚げようと東京に出て行って、何年も疎遠だった  
遠い親戚の叔父が、多額の借金をつくって、田舎へ帰っ  
て来た。しょうがないんで、一家みんなでその借金を返  
していくことになった。(地方創生とは…)**



「地方創生」という言葉は、最近よく聞くとお思います。簡単に言えば、東京への一極集中を見直して、地方の人口減少に歯止めをかけようという一連の政策で、2014年から始まりました。極端なことを言えば、地方で起こっていることに、きちんとみんなの目が向くようになってから、高々5年弱です。

戦争が終わって73年、その間(実際にはその前からなのですが)、経済も文化もすべて首都圏集中だったわけです。集団就職とか、聞いたことがありますよね。少子化とか経済の低迷とか、様々な社会課題が顕在化して、やっと地方に目が向いてきたわけです。

「地方創生」は、60年以上に渡って行なわれてきた首都圏集中を、今からなんとかしようぜという号令ですが、まずはこうした状況を生んできたここまでの政策に、少なくとも怒らねばならないでしょう。

地方創生には、そうした地方の静かな怒りが背後にあります。

## 地方を知ろう

「地方創生」って、総務省の資料では「日本全体の活力を上げることを目的とした政策」と説明されています。ちょっと待って、日本全体のためにオレらの町はあるんじゃないやねえよ、そういう声もありそうです。でも実は、過疎地は日本の半分以上を超えています(59.7%)。詳しい数字はこの後で説明しますが、その半分以上の地域に住んでいる人は、総人口の8.6%、1割もいません。ですから過疎なのですが、それ以外の9割以上の人々は、都市と呼ばれている場所に住んでいます。

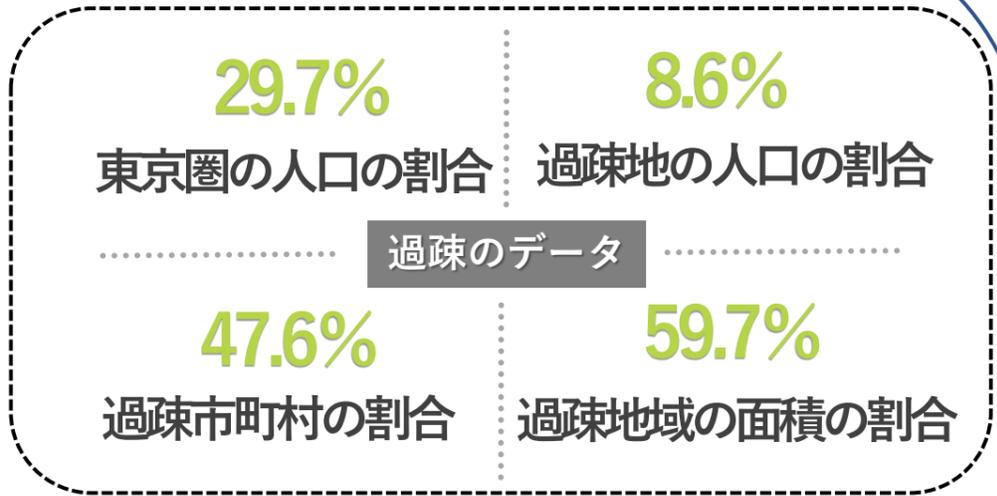
### 数字で見る地方と都市

#### 過疎と過密・移動する人々

日本では、人口200万人以上の都市を中心とした五大都市圏(東京都圏、大阪市、名古屋市、福岡市、札幌市)と、その中心市への通勤、通学者の比率が1.5%以上の周辺自治体を都市圏(別名「1.5%都市圏」)と呼んでいます。但し、次に示すように、転入者数の超過があるのは東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県、福岡県、愛知県及び大阪府の7都府県で、実質的に首都圏が、都市の代表と言っていいでしょう。

東京都市圏の昼間人口は、2015年の国勢調査では、約3,773万人(37,773,329人)で、日本の人口1億2,700万人(127,094,745人)に対して29.72%、約3割弱の人間が生活しています。さらに経済活動で言えば、1人当たりの県民所得は、東京都の場合5,378(千円)ですが、日本の全都道府県の平均が3,190(千円)ですので、東京圏に人が集まってくる最大の理由はそこにあるでしょう(内閣府平成27年度県民経済計算)。

しかし、首都圏の面積は622km<sup>2</sup>、日本の総面積378,000 km<sup>2</sup>に対して、0.16%しかありません。日本の都市圏は、明らかに過密人口と言えるでしょう。その結果が、地方の過疎となるわけです。



過疎地とは、過疎地域自立促進特別措置法で、その要件が細かく決められており、総務省が市町村単位で指定します。自治体の財政状態と、人口減少率・高齢者率(65歳以上)・若年者率(15歳以上30歳未満)による人口要件の2つの側面から判断されます。

7/47

転入超過都道府県数



過疎地域の状況	過疎市町村	全国	過疎地域割合
市町村数 (H29.4)	817	1,718	47.6%
人口 (H27国勢調査: 万人)	1,088	12,709	8.6%
面積 (H27国勢調査: Km <sup>2</sup> )	225,468	377,971	59.7%

地方の問題は、確かに日本全体の問題です。でもそれは、そこに住んでいる、1割もない人々がどうにかできるような問題でもないことを知ったうえで、地方創生という言葉の意味を考える必要があります。

# 「近郊都市」とは

一般に、都市および都市生活者の居住地周辺を指します。主に、近郊農業や観光などの地域ですが、かつての経済成長時に住宅地等として虫食的に開発された地域が多く含まれています。総じて、「田舎でもなく都会でもない」という特徴を持っています。ここでは、東京からの距離と自治体の人口規模をもとに、以下のような属性を持った地域を「近郊都市」と呼びます。

**距離:**

- ・東京から距離80キロ程度、100キロ圏内
- ・電車、バス等の公共交通機関で2時間以内

**人口規模:**

- ・基礎自治体の人口規模として、1万人弱程度

これは、都市部への通勤などが辛うじて可能な地域を意味しています。また、総務省の自治体合併の構想地域が「人口1万人未満を目安とする小規模な自治体」であることを鑑みて、この条件を設定しました。

こうした近郊都市は、大きく2つの特徴を持っています。

- ・表立って注目されていない  
近年の地方創生政策により、地方の過疎地や限界集落等に注目が集まりつつありますが、この近郊都市に関しては、余リフォーカスが当たることがなく、実態が余り知られていません。  
しかし実際問題として、それらの近郊都市でも過疎指定を受ける地域も出てきています。
- ・都市部との関係性が強い  
近郊都市は、1次産業の他に固有の産業を持つなど、複合的な経済圏であり、近郊農業を中心に、都市への産物、製品の供給や、都市に対する居住区域という特徴を持つなど、都市部にとっても非常に関係性の高い地域です。そのため、近郊都市の抱える課題は、都市圏にとっては、無視することができない社会課題なのです。

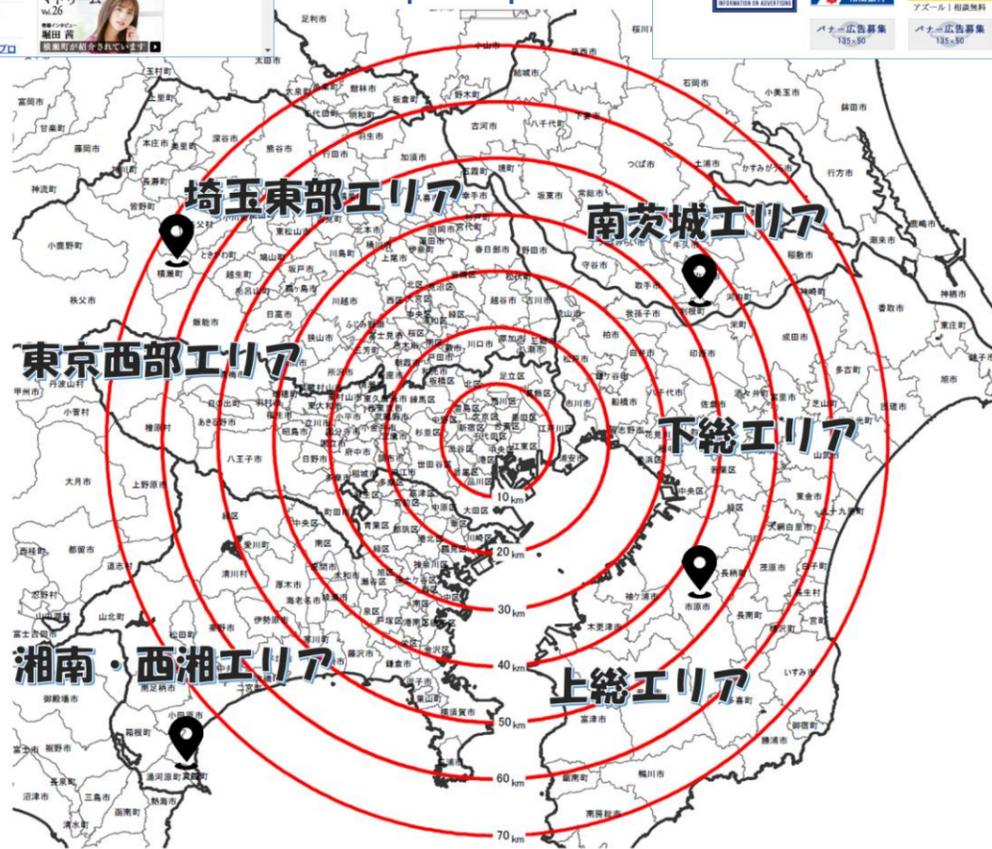
以上から、本研究では、東京圏に対する近郊都市として、茨城県北相馬郡利根町（南茨城エリア）、埼玉県秩父郡横瀬町（埼玉東部エリア）、神奈川県足柄下郡真鶴町（湘南西湘エリア）、そして千葉県市原市（上総エリア）の4地域を選び出しました。どこも都市部の学生には、殆ど知られていない地域です。

## 4つの近郊都市



**横瀬町**  
住所: 埼玉県秩父郡横瀬町  
距離: 東京より70キロ弱  
最寄り駅: 西部秩父線横瀬駅  
芦ヶ久保駅  
人口: 8,519人 (2015年10月)

**利根町**  
住所: 茨城県北相馬郡利根町  
距離: 東京より40キロ強  
最寄り駅: 成田線布佐駅  
人口: 16,313人 (2015年10月)



**真鶴町**  
住所: 神奈川県足柄下郡真鶴町  
距離: 東京より80キロ弱  
最寄り駅: JR東海道線真鶴駅  
人口: 7,333人 (2015年10月)

**市原市**  
住所: 千葉県市原市  
距離: 東京より40キロ強  
最寄り駅: JR内房線五井駅  
人口: 27,4656人 (2015年10月)



本プロジェクトでは、地域分析の観点として、現在を中心に、過去と未来の2つの方向で、3つの分析軸を作りました。

- ①その町の概況（現在）
- ②町史（町の過去）
- ③その町の未来

①は、公開資料を使えば、ほぼ理解可能です。

人口（動態、静態）、地積、位置、交通機関、公共施設、人口分布など、様々な項目がありますが、仮説として、交通機関は地域の文化圏を規定し、公共施設は政策課題を推定することができ、また人口分布は、地域固有の、産業・経済との関係性を推定することができます。ここでは、「人口コーホート分析」という手法を使って、地域を理解します。

また②の町史は、その町の本来の役割、すなわち産業、経済の特性とそれらがどう変わって行ったのか、地域の社会変化を知ることができます。但し、一般に地域住民は、こと町史などに関して、余り重要視していないことが多く、域内にいると多くの地域資産を見逃すことが多いのが、ここまでの経験での一つの知見です。

このあたりに、余所者である我々が関わる意義があると思っています。

## 人口コーホート分析 Population Cohort Analysis

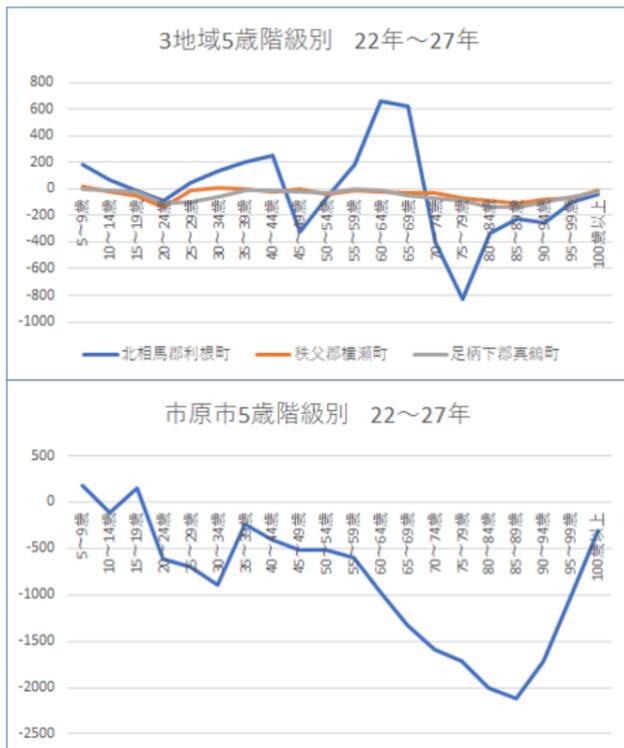
ある地域を理解しようとした場合、公的設備や資源、自然環境などに目が向きます。しかし元々、地域と言うのは民俗学者の宮本常一の言葉を借りれば「人々の生活の爪あと」であって、そこにいる人にこそ注目すべきだと考えています。

人口コーホート分析は、地域を研究する場合には大前提となる手法です。コーホートとは、「共通した因子を持ち、観察対象となる集団のこと。人口学においては同年（または同期間）に出生した集団を意味する」と説明されています。

あるコーホート毎の人口増減に着目し、人のライフイベントが増減に反映すると仮定して、地域の姿を客観化していきます。人口を見る場合、基礎データとなる国勢調査データが5年ごとに採られているので、5年を1コーホートと考えるのが一番自然です。実際に学生に聞いてみても、自分より2.5歳上下までが同年代となるというのは感覚的に納得できるということでした。例えば、4年生から見ると新入生はもう違う世代に見える、その逆も同じ、すなわち2.5歳が同じ世代、同じライフイベントに出会うと考えるわけです。



画像：Pete Linforth (Pixabay)



4つの近郊都市を対象に、直近の国勢調査データの2015（平成27）年とその5年前の2010（平成22年）の市区町村別人口データから、5歳階級別に抽出しました。

例えば平成22年に0歳から4歳のコーホートに含まれていた人は、5年後の国勢調査時には5歳から9歳のコーホートで換算されます。五年間の変化を、5歳ごとに求めていくわけです。それを全世代に対して求めたものが、人口コーホート分析の基本データになります。簡単に言ってしまうと、ある地域の人口移動（社会増減）を分析したものです。横瀬町、利根町、真鶴町の3地域の変化をグラフ化してみたものが、以下の図左になります。また、市域である市原市についても、同じようにグラフ化してみました。

真鶴町と横瀬町はほぼ同じようなカーブを描いています。これは人の出入りが少ない地域を意味しています。それに比べて、利根町は20代後半から40代までが増加しており、40代後半から急激に下がります。そして60代から増加し、さらに70代からの低下も激しい様子が見れます。

これは差を取っているだけです。世代の人数の多寡は関係ありません。ある年代が急激に増減するのは、そこに理由があるはずなんです。

市原市は、若干この利根町のように高齢者が減って行きますが、中年世代の増加もありません。10代後半から20代にかけてが微増し、あとは減少していくパターンが見て取れます。特に横瀬町、真鶴町の人口カーブは、近郊都市の特徴のように思えます。

別のプロジェクトで分析した、人口80万都市の人口コーホート図が3枚目です。世田谷区、福井県、徳島県、高知県なのですが、明らかに世田谷区は10代後半から30代までが増加します。これは進学、就職でしょう。都市部はこういうパターンです。それに比べて、福井、徳島、高知はその世代が逆カーブで減ります。つまり地方のその世代が、都市部に移動していくということがここでわかります。

近郊都市は、ここでわかるように、都市でも地方でもない、固有の人口カーブを描きます。実は、人口の転入、転出率で言えば、神奈川、千葉、埼玉は2, 3, 4位の順位で、茨城だけ18位、転出超過です。愛知、大阪、福岡、京都、そして東京だけが転入超過ですので、近郊都市のある広域自治体は、明らかに都市型のパターンです。しかし市区町村レベルですと、少なくともコーホート分析では、そのどちらでもない傾向を示しています。



# オーラルヒストリーと地域理解

日本の都市部は、例外なく大空襲に遭い、戦後から新たな歴史を始めています。

近郊都市では、地方とは異なり、都市との関係性が重要であり、それが戦後どう変化して来たのかを、把握したいと考えてました。

多くの日本の基礎自治体では、昭和の終わり頃に町史の編纂事業を行っています。それらが地域理解の基礎資料になるわけですが、そこから30年近く過ぎていることと合わせて、どうしても行政中心の視点になってしまうという傾向があります。

そのため、今回のプロジェクトでは地域のシニアに対するインタビューの設定を、各地にお願いいたしました。

できれば戦前生まれで、その地域のことを体験として知っていらしゃる方を、ご紹介いただきました。実は、各自治体さんがどういう方を選んでくださるかが、その町を表す重要なキーになると考えています。

予想通り、見事なくらいに、その町を象徴するような人選になりました。それらの方々と大学生が対話しつつ、シニアのオーラルヒストリーを通して、「古い町」を明らかにしたかったのです。

横瀬町は、果樹園経営者、元養蚕業から弱電業会社員、利根町は、元大企業会社員、行商人、真鶴町は、家業が漁業で流通業に携わってきた方と農園経営者の方、そして市原市は、家業が農業で教員だった方という、その地域の特徴を見事に示す人々になりました。

どなたも丁寧に学生の相手をしてくださり、いろいろなお話を伺うことができました。

雑駁な感想ですが、今はもう70代と言っても、かつての年齢のイメージより10歳は若いということに合わせて、70歳はまだまだ自分語りをするほど、自分の人生を語りたくないのではないかとことです。

そのため、70代前半までの方は、地域のことを語っていただきました。実は我々が知りたかったのは、自分語りでした。なぜなら、長く生きてきた方の人生は、そのまま地域や時代の歴史にもなって行くからです。最年長90歳の、利根町の行商人の方が語る商売のこと、家のことは、そのまま素晴らしい戦後史になっていました。また横瀬の元養蚕業の方の思い出も、高度成長期の社会変化をそのまま体現するものでした。

※本インタビューの公開は、承諾いただいております。

## 近郊都市のシニア

Y栄一郎氏  
昭和17年11月生まれ  
埼玉県横瀬町在住  
元養蚕業、弱電業会社員、現在農業等



昭和30年代の後半に、養蚕業から秩父方面にできた弱電会社の社員に転職した。周囲のハタ屋さんは、軒並み、会社員に転身して行った。時あたかも、三種の神器を人々が求め始めた時期で、収入が養蚕よりは遥かに大きく、廃業する人々が多かった。地方から集団就職の若者が集まり、またハタ屋さんの女工さんも、工場のほうに移って行った。昭和40年代頭には、ハタ屋さんは軒並み廃業して行った。60歳まで会社員を勤めあげたが、週末は家業の農業を手伝うなどをすると暮らしていた。町の変化は、やはり昭和44年の西武鉄道の開業は大きな切っ掛けだった。



A時夫氏 果樹園経営・農業  
昭和13年1月生まれ  
埼玉県横瀬町在住  
元会社員、果樹園経営

昭和31年よりケミカル系企業勤務。昭和40年代年初頭頃より、西武鉄道の開業とともに、観光農園を開設する。当初は西武鉄道社員が多く農園を経営していた。当時は、「車が動けないほど」多くの人々が、果樹園に来た。そのため、芦ヶ久保駅に特急が止まった。現在は、芦ヶ久保で降りる客が減って来たので、横瀬に停車するようになっていった。最盛期は、近隣には果樹園が50軒ほどあったが、現在は10軒ほど。当時30代の若手が、果樹園を開発して行ったが、そこから50年経過し、大きな課題は、やはり後継者問題。家業は元々、炭焼き、養蚕等。家業を手伝わずに、就職した背景には、昭和31年の時点で、木炭、養蚕が斜陽化していく兆しがあり、企業への就職を選択した。

I文子氏 昭和4年10月生まれ  
茨城県利根町在住  
職業は、行商人（自称籠背負い）  
生まれは、千葉県 16歳の時に終戦を迎えた。  
利根町近隣は疎開してくる人々が多かった。



20歳に結婚して、隣の利根町へ移転。昭和25年ころから、行商を始める。お姑さんが元々、銀座に行商に行っていたため、家業を引き継ぐ形で、行商を始める。現在まで70年近く、銀座に行商に行っている。当時、行商列車が走っており、布佐、新木、小林、湖北、安食など、沿線から多くの担ぎ屋さんが、都市部に売りに行っていた。上野で乗り換えて都電で銀座へ行き、行商をした。当時は、米専門で、特に銀座の企業に売りに行っていた。食べ物が無かったので、米を持っていくと、飛ぶように売れた。一日に2回も売りに行った記憶がある。よく上野駅で一斉取り締まり（立ち入り臨検）があり、何回も没収された記憶がある。警官が来るとしかたなく米を上野駅に捨てたりしていたが、悔しかった。供米などが厳しく、農家も米に必死だった時代だった。米が没収されると、よくお姑さんに叱られた。



Y茂方氏 昭和12年6月生まれ  
茨城県利根町在住  
元会社員

山梨県斐崎市出身。進学のために上京し、会社員を勤めあげる。昭和55年に、利根ニュータウンに自宅を購入する。土地が広く（1軒55坪以上）、道路も整備されており、住宅として魅力だった。成田線が、当時は10年以内に複線になると言われていたもので、それにも後押しされた。但し、翌年1981年（昭和56年）8月24日に、利根川の支流、小貝川が氾濫して被害を受けたので、大変な所に越してきちゃったと思ったこともあった。Y氏が転居して来た昭和55年頃は、まだまだニュータウン開発の途中で、早い段階での住民だった。周囲は、若干より若い世代が多かった。Y氏は、当時40代、ご子息が小学生だった。近隣には産業が無かったので、殆どの人々が、都内に向けて通勤をしていた。やはり町内に駅が無く、最寄りの布佐までの橋が渋滞しているの、仕事をやる上では不便で、子供たちの世代は、軒並み出て行った。

S一美氏  
昭和23年8月生まれ  
家業は漁師、流通業（スーパー）  
M茂氏  
昭和25年1月生まれ  
家業は農業、農園



S氏は、昭和40年代に職業を選ぶときには、家業（漁業）を引き継ぐことはなかった。昭和2、30年代の最盛期は一網2万とも言われたが、その頃は、漁業は下火になっていた。さらに高度成長期以降は、都市部の企業に就職した方が高い収入を得られた。

昭和31年に岩地区、真鶴地区が合併した。元々両地区の気質の違いのようなものがあって、その違いは、今でも残っているように思える。農地も田んぼも何もない真鶴が、なぜ豊かに暮らせたのか。「港」の存在に尽きる。漁業から石材業も、港を利用した産業と言える。



漁業と石材業を中心とした産業が、地元で豊かな経済をもたらしたため、江戸流の粋な文化が根付いていた。農地がないため、農村のような気質は存在しない。

花街文化と、文人墨客を迎えた地域の空気のようなものが、真鶴町には存在している。「岩の石屋は豆腐の皮を剥いで食べる」元々、地域に新しい経済、文化をもたらすのは、余所者「旅の人」、真鶴には、土着の実力者は存在しない。



M靖彦氏  
昭和18年4月生まれ  
市原市飯給出身同地在住  
元教諭

市原南部地域は、元々四つの地区が合併したものの。農業地帯であり、さらに林業や漁業、海苔の養殖や炭焼きなども行われていた。元々海辺の地域なため、土地そのものは余り肥沃ではなく、養蚕業も昭和50年頃までは行われていた。

当時は買い付けがこの地域まで来ていたが、衰退して行き、現在ではその痕跡は無い。時代の変化もあり、仕事を継承せずに、地元を離れる人も昭和40年代以降は多かった。

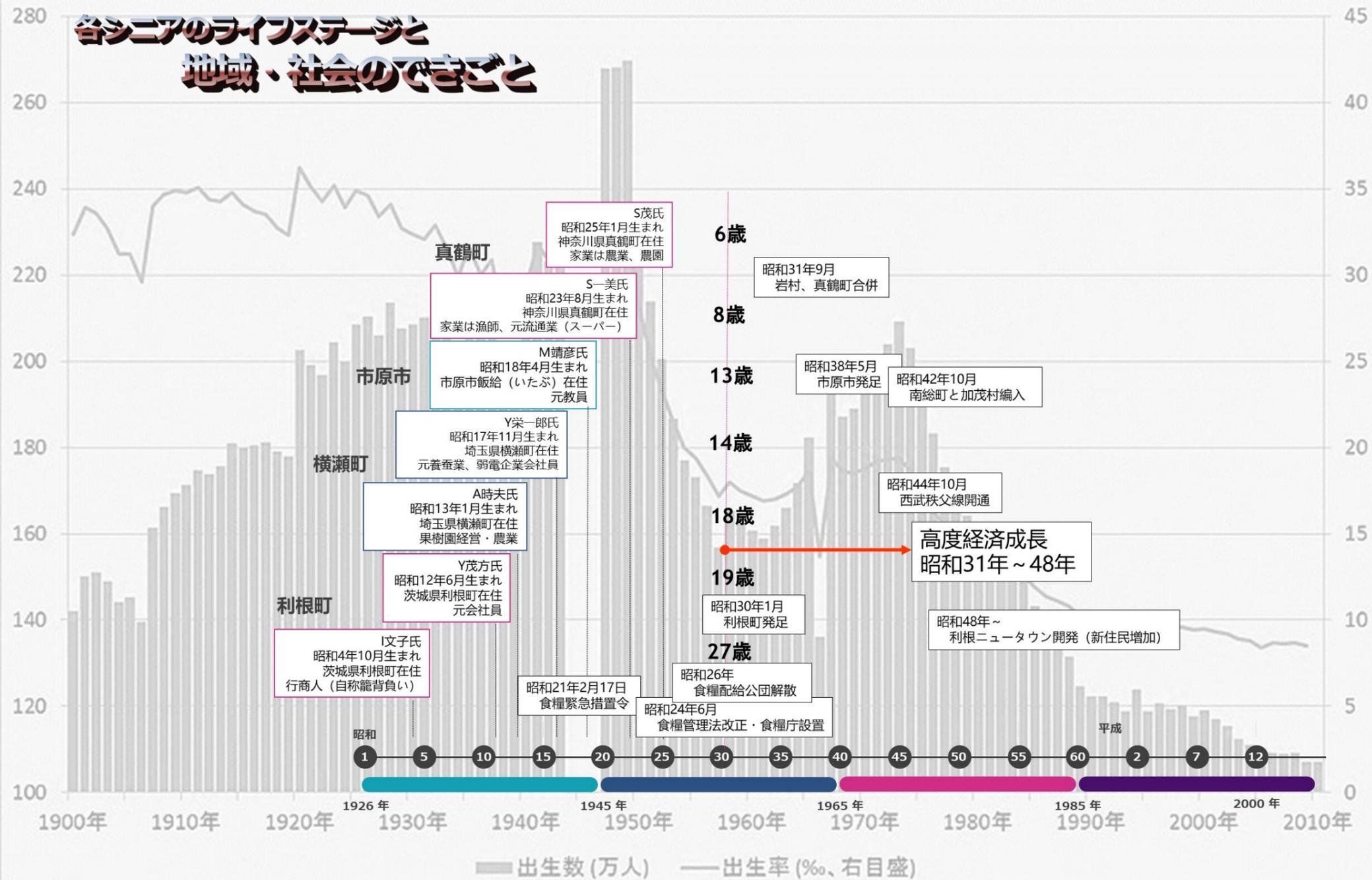
臨海工業地帯（京葉工業地帯）の成立とともに、近隣の農家の人々も、そちらで働くようになって行った。小湊鉄道は、主に通勤にも使われていた。この工業地帯の恩恵は大いに受けてはいるが、北部地帯への複雑な思いはある。

この地域は、長閑で暮らしやすい地域だと思っているが、農業自体の衰退と併せるように、地域愛も減って行くように見受けられた。そのため、市域保全と活性化の活動に力を入れるようになってきている。

現在は、地域保全と活性化を図る団体「市原ネットワーク」を立ち上げ、荒れた地域の整備や、滝の整備、小湊鉄道沿線の整備などに取り組んでいる。また、市の南部地域にある地域活動団体の連携を図るため、加茂里山連合（南市原里山連合）を発足させて、南部地域の中心的な活動をしている。



# 各シニアのライフステージと 地域・社会のできごと



このリサーチプロジェクトでは、人口コーホート分析によって、地域の客観データを明らかにしましたが、さらに地域の在住者に対するインタビューによって、市民のオーラルヒストリーを抽出しながら、地域の変化を明らかにするというを行いました。各自治体さんにご紹介いただいた、最高齢90歳から69歳まで、延べ7名の「その町のことをよく知っているシニアの方」のライフステージを、上の図に整理しました。

殆どの方が、農業、漁業などの1次産業の家業の家に生まれています。昭和30年代から始まる高度成長期以前は、一次産業従事者が多くを占めていたため、当然ですが、そのまま農業を引き継がれたのは、真鶴町のM茂氏（昭和25年生）だけで、横瀬町のY栄一郎氏（昭和17年生）は、養蚕業から弱電企業の会社員へ、真鶴町のS美氏（昭和23年生）も、家業の漁師を継がずに、元流通業（スーパー）に就いています。また市原市のM靖彦氏（昭和18年生）は進学のために地域を出てそのまま教員の道を選択しています。

弱電企業は、高度成長期に広まって行った三種の神器（冷蔵庫、洗濯機、テレビ）を製造していましたし、やはり高度成長期には、流通革命が起こり、豊かな商品が大量に流通するという時代になって行きました。Y栄一郎氏、S美氏の職業の選択は、まさにあの時代の先端的な産業だったということです。また、高度成長期以降は、中等、高等教育への進学率も高まって行ったのは、市原のM靖彦氏が示しています。

注目されるのは、横瀬町のA時夫氏（昭和13年生）です。家業は農業、林業だったとのことですが、それを引き継がずに一時、ケミカル系企業に勤め、その後、西武秩父線の開業とともに、西武鉄道が開発した観光果樹園を営んでいます。この観光果樹園は、1次産業の範疇ではあるのですが、観光業でありサービス業として考えるべきでしょう。

高度成長期の後期から、経済的に豊かになって行った人々に、レジャーブームが起こります。日帰りで手軽に楽しめる、近郊都市の果樹園は、都市部の人には格好の観光地だったことが伺えます。

利根町のY茂方氏（昭和12年生）は、まさにその時代を支えた、企業戦士でした。山梨県韮崎市出身とのことで、家業に関しては伺えませんでした。大学進学のために東京に出てきて、そのまま都内の企業に就職して勤め上げました。家を買うことが、一生の仕事だった時代に、利根町で開発された「利根ニュータウン」を購入して、都内まで通っていたそうです。

昭和2桁生まれのこれらの方々は、ライフステージがそのまま日本の高度成長期と重なっています。



最高齢の、利根町I氏（昭和4年生）は、高度成長の入り口だった昭和30年代初頭には20代半ばだったため、この中で唯一、戦中から戦後、昭和20年代から30年代のはっきりとした記憶を持っています。

やはり農家に生まれたI氏は、昭和25年頃から、嫁入り先の家業を引き継ぎ行商を始めました。当時は米専門だったということですが、その背後には、米穀や主要食糧の生産、流通、消費に対して、政府が介入して管理することを定めた、昭和17年制定の食糧管理法に基づく、食糧制度があります。生産者である農家は、自家保有以外を公定価格で供出し（供米）、政府が消費者へと配給するもので、食糧営団という特殊法人が米穀の加工、管理を行い、これ以外の流通は一切認められないという制度でした。

こうした食糧営団以外で流通する米穀を、私的な流通という意味で「闇米」と呼んでいます。終戦直後は、食糧供給状況は深刻を極めたため、政府は様々な策を講じます。しかし、戦後も引き続いて行われた食糧管理法に沿った食糧の配給自体が、決して十分なものではなく、そのために闇の流通自体が、都市部の人間には必要とされていました。昭和22年に、闇市の闇米を拒否して配給食糧のみを食べ続け、栄養失調で餓死した裁判官がいました。

I氏が東京、銀座に行商に持って行ったのは、まさにその米そのものでした。大きさではなく、こうした行商人たちが、都市部、東京の人々を支えていたと言えるでしょう。



昭和26年に公開されたニュース映画、「茨城県ニュース No.6」で、「供米を阻害するもの」という表題で、闇米の摘発風景が映ります。蒸気機関車が牽引する列車が駅に着き、多くの行商人が降りてきます。

「終戦以来満6年、いまだに闇米の移動はその後を絶たず、利根川を渡る数量は毎日平均500俵をくだらないとされています。現在ではこれらの人たちは、一種の職業人と化し、組合まで作り色々な方法を用いて、その移動は巧妙を極めています。」とナレーションが入りますが、まるで劇映画を見ているようです。

90歳の行商人が体験したのは、こういう時代だったのです。尚、こうした行商人の多くが女性だったのは、男性が戦死しているか、兵役から帰ってきて復職することで、戦時中の働き手だった女性が失業することが多かったということです。ちなみにここで押収された米は、払い下げられて闇市に回って行ったそうです。

# カメラルポ・現地報告①

## 横瀬町 戦後社会の相庭

### 養蚕の記憶と鉄道之力

横瀬町は、埼玉県の中西部、秩父市に隣接した地域です。

町長の紹介によれば

「横瀬町は、49平米、7キロ×7キロの小さな町です。人が住んでいる場所は、地域の中でも狭く、コンパクトな町と言えるでしょう。町内には、小学校、中学校が1つつあり、高校から町の外に行くことになります。町内には、お菓子屋はありませんが、隣接の人口6万強秩父市を含めた生活圏があります。西部秩父線が主要な鉄道で、駅が2つ、特急停車駅の横瀬駅と、芦ヶ久保の2つです。」

この授業で取り上げられるまで、横瀬町のことについて殆ど知りませんでした。「心が叫びたがっているんだ」、通称ここさけの舞台になった町ということを知っている学生もいましたが、決して多くはありません。

武甲山から産出する石灰石を原料とするセメントが、地域の重要な地産産業となっており、西武鉄道も元々その輸送手段として開通しています。西武鉄道は、さらに地域の開発を行い、鉄道の利用者と沿線の高価値化を行っていきます。

地域のシニアである、A時夫氏が観光果樹園の経営に乗り出すのも、西武鉄道の利用者を想定したもので、さらに土地や果樹園の整備なども、西武鉄道の支援によってなされたとのことでした。

まずこの町は、インフラとしての鉄道の重要性を教えてください。

横瀬町はさらに、かつて秩父を中心とした、養蚕、織物などの町だったという歴史も持ちます。秩父地方は、古くより養蚕業が盛んで、絹の産地として長い歴史を持っています。横瀬町歴史民俗資料館を覗きましたが、県指定無形民俗文化財として人形芝居があり、当時は秩父の織物の宣伝の役割もあったとされています。もう一方、Y栄一郎氏の実家は、元養蚕業者、通称ハタ屋さんで、二階には養蚕の設備の跡がたくさん残っていました。初めて見る蚕部屋は、大変興味深い佇まいでしたが、近々取り壊すそうです。Y氏は、家業を継がず、会社員として弱電機器の製造に携わったそうですが、日本の産業の移り変わりを体現したような人生を送ったように思いました。

昭和2, 30年以降、この国がどのように敗戦から復興し、新しい産業を成立させて、経済成長に向かっていったのか、その間、社会の何がどう変わって行ったのか、この2人の証言からはっきり聞き取ることが出来ました。横瀬町には、戦後社会の様々な記憶、痕跡があるように思えます。「戦後社会の箱庭」そう呼んでも過言ではないでしょう。



## 利根町

### 戦後の東京を支えた町

### 行商と企業戦士

茨城県最南部、千葉県との県境に利根町があります。実は利根という駅はありません。東京方面から向かうと、最寄りの駅は、隣接する千葉県我孫子市にある成田線の布佐駅になります。そこから町に行くための主な交通手段は自動車です。

利根川を渡って訪れたこの町は、私たちが見る限り、普通の観光地には見えません。土産物屋さんや食べ物屋さんも見当たりませんし、著名な名所や史跡なども多くはありません。ただ由緒ある神社がいくつかあり、その境内の清浄な雰囲気は素晴らしく、また雄大な利根川の川縁を流れる風は清々しく、町内全域に広がる田園風景と広い空は大したものなのです。

この町では、2人の住民に出会い、お話を伺いました。そのお二方に会えたことが、何より今回、利根町での大きな収穫でした。この方々のこれまでの人生こそが、利根町の一つの歴史であり存在意義であると、大げさではなく感じています。

利根町には、ニュータウンと呼ばれている、大きな住宅地がいくつかあります。ニュータウンとは、戦後の都市部での住宅不足を受けて、昭和30年代以降に都市近郊に開発された大規模な住宅地のことです。当時このような戸建て住宅を個人で購入したのは、都心で企業戦士として日本の高度経済成長を支えていた、ホワイトカラーと呼ばれた会社員たちが中心でした。

利根ニュータウン内にある、ほぼシャッター街となってしまった商店街でお会いしたY氏は、まさにその中の一人です。かつては、賑わいを見せていたニュータウンも、住民の高齢化、商店街の衰退などで、今はひっそりとした観のある街並みとなりました。

しかしこの町が、かつて東京で日本を支えた人たちの終の棲家なのです。

もうお一方は、御年90歳になった現在も行商を続ける女性、I氏です。行商人は、昭和20年代、戦後の未曾有の食糧難の時代に、機能していなかった配給制度をくぐりながら、東京に米や野菜などの食料を運び続けた方々のことです。かつては成田線や常磐線のほか、京成線などを利用し千葉・茨城方面から東京へ農産物を運んだ行商人のグループが多数存在していましたが、その記録は殆どありません。行商人の方々が、戦後の都市部の人々の命を繋いだのもは紛れもない事実です。

利根町の行商と企業戦士は、戦後の東京を支えました。

# 近郊都市、まとめ

## ○地域間連携がポイント、だが...

地方の抱える現状から、地方創生という政策に繋がりますが、その言葉自体は明文化されていません。主に地方活性化への取り組みや事業を指して使われます。そこでは、「人口減少問題の克服」と「成長力の確保」が長期ビジョンに掲げられています。これは、戦後たくさんの子供がいた時代の成功モデルのリニューアルという性格もあり、その具体策としては、以下の4つが挙げられています。



- ①地方での安定雇用の創出
- ②首都圏から地方への転入増加
- ③若い世代のファミリープランの実現
- ④地域間連携

①から③までは、ほぼ同じことを言っています。地方に産業を作り出し、教育や就職のために首都圏に流入した若者を雇用できるように、また地方でのワークライフバランスを意識した暮らし方を指すという。

若者と女性の正規雇用を向上するという意味では、地方だけの課題ではありません。そして何より、戦後70年以上、それは出来てこなかった。首都圏ではこれからも出来そうもないので、地方に活路を見出そう、そう考えていいと思っています。

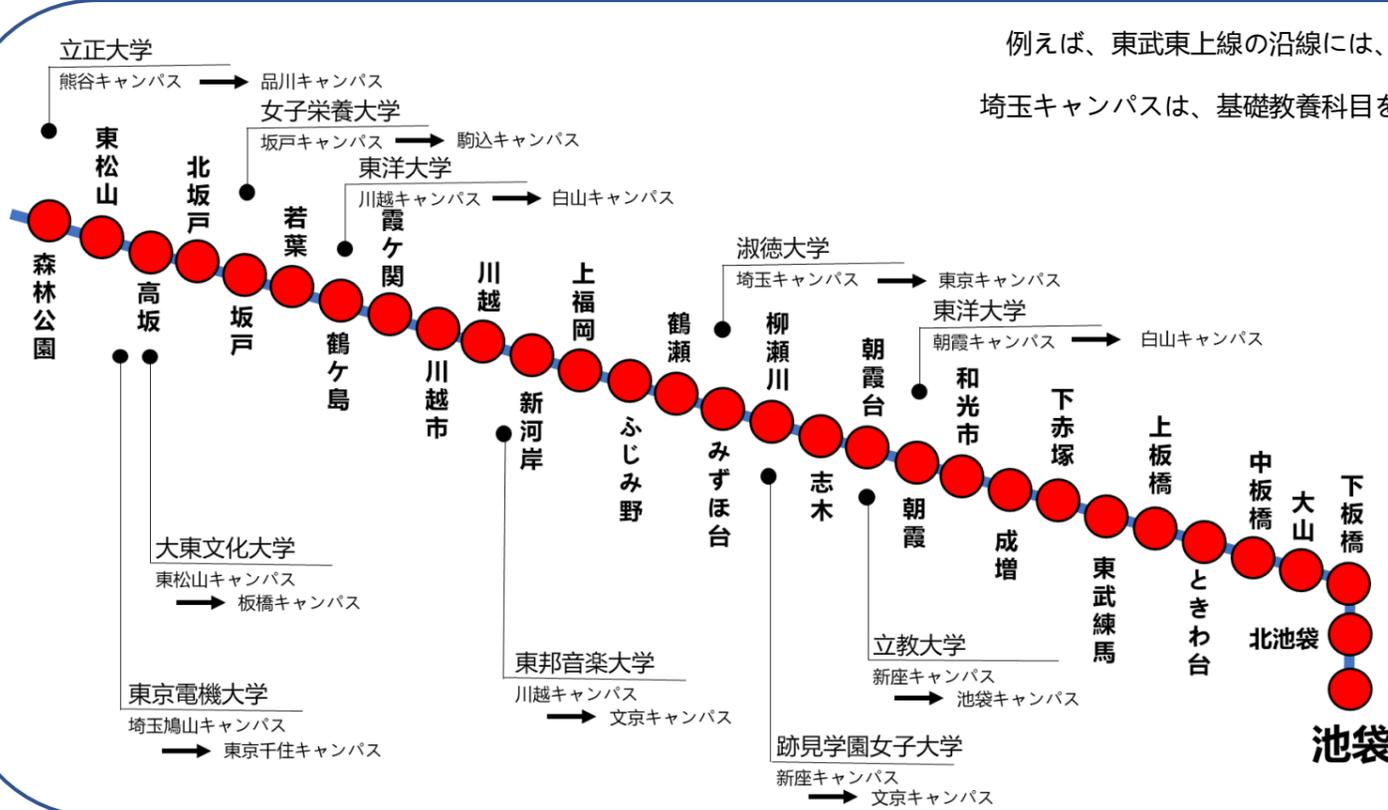
地方創生で最も重要な点は、④の地域間連携でしょう。

それぞれの地域が生き残りを争うことではなく、様々な地域が連携して、今まで創れなかった地方の魅力を作り上げていくこと。観光産業の活性化、地元名産品のPR、文化・アート・スポーツの振興推進などの他、企業の地方拠点強化や、テレワークやサテライトオフィスなど新しいビジネスモデルの創出は、ひとつの地域の努力では、今まで様々に行われてきた、単なる町興しと変わりません。

## では、どことどう連携するのか?

その問いかけが、必要になってきます。

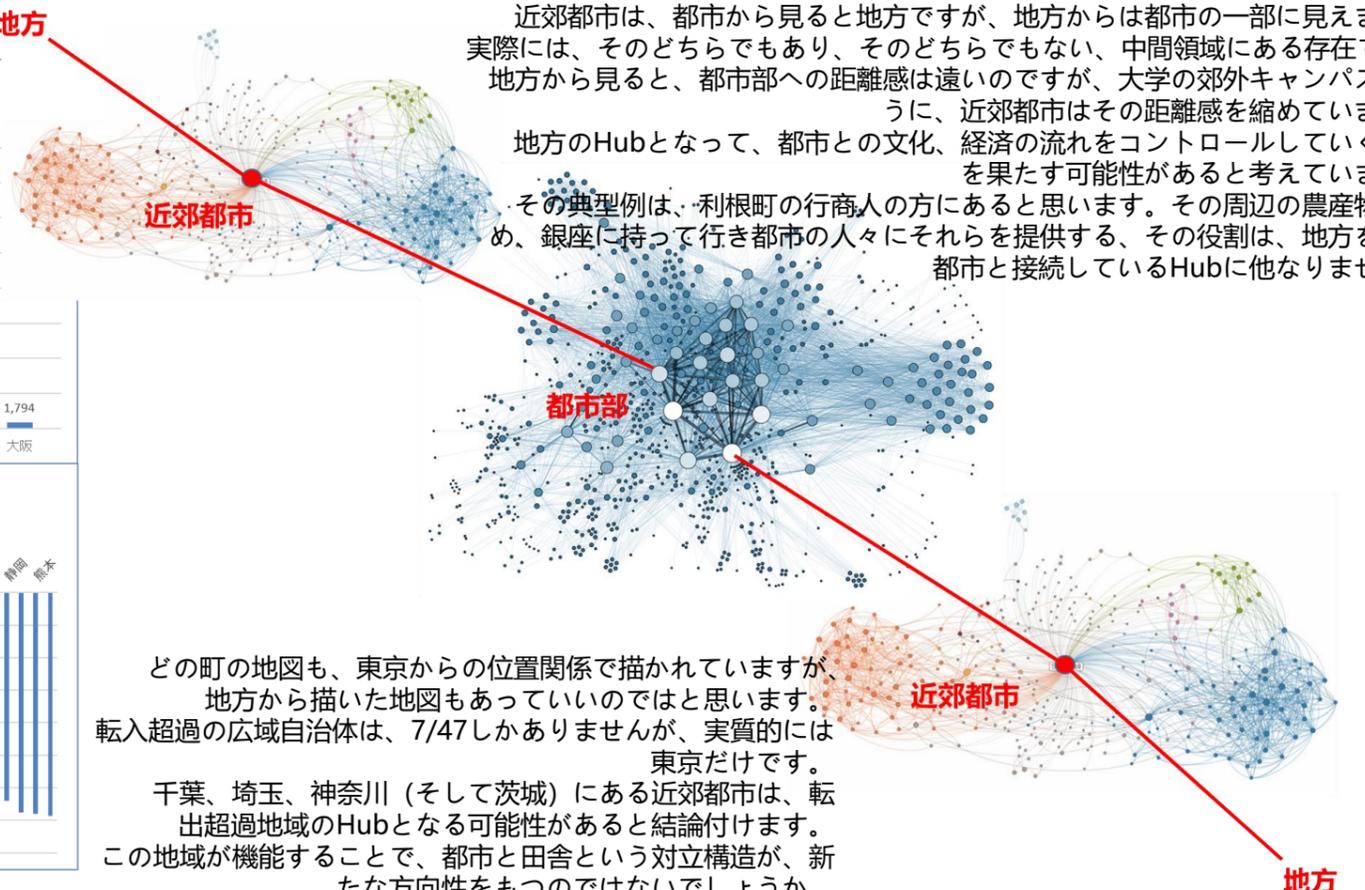
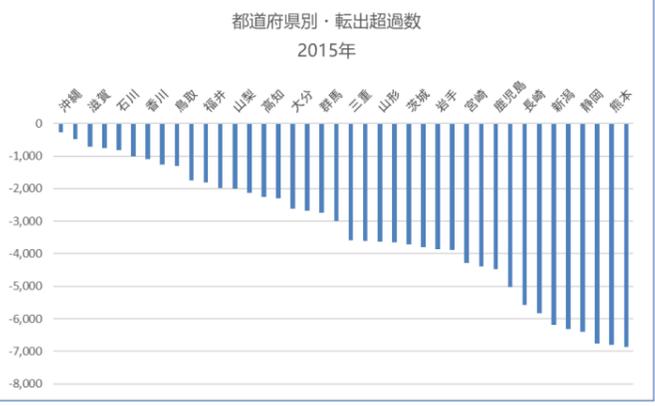
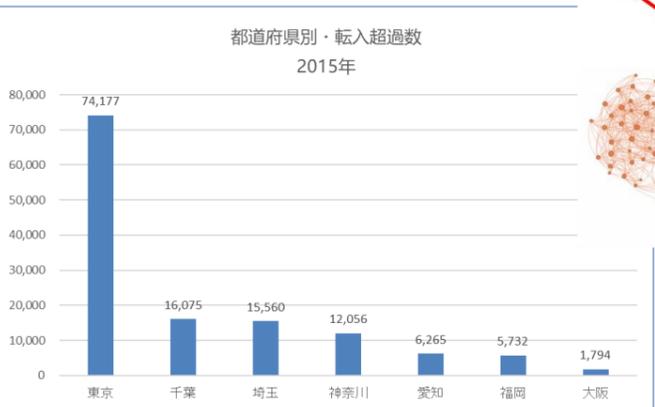
## ○近郊都市は、都市と地方のHUB



例えば、東武東上線の沿線には、たくさんの大学がありますが、そのうちの多くが、都内にもキャンパスを持っています。埼玉キャンパスは、基礎教養科目を中心とした下級生対象、都内は専門科目といった割り振りをしているケースが多いようです。何故でしょう？

東武東上線だけではなく、小田急線や西武線などの郊外に向かう私鉄沿線にも、多くの大学キャンパスがあります。そもそも、都内から離れた郊外キャンパスを設けるのは、何故でしょうか。もちろん、広い校地を確保するため、都内を離れたという理由もありますが、ではそれらの郊外キャンパスは、どういう役割を果たしているのでしょうか。

ある大学では、郊外の校舎からさらに地方に向けた直通のスクールバスが出ています。まずは下級生の頃の2年間、そちらに通うことで、都内にある本校に対する心理的な距離感を減らす役割があります。これらのキャンパスは、地方の生徒にするHubとして機能しています。Hubとは、何かネットワーク状のものの中で、多くの繋がりを持つものを意味しています。



近郊都市は、都市から見ると地方ですが、地方からは都市の一部に見えます。実際には、そのどちらでもあり、そのどちらでもない、中間領域にある存在です。地方から見ると、都市部への距離感は遠いのですが、大学の郊外キャンパスのように、近郊都市はその距離感を縮めています。地方のHubとなって、都市との文化、経済の流れをコントロールしていく役割を果たす可能性があると考えています。その典型例は、利根町の行商人の方にあると思います。その周辺の農産物を集め、銀座に持って行き都市の人々にそれらを提供する、その役割は、地方を繋げ都市と接続しているHubに他なりません。

どの町の地図も、東京からの位置関係で描かれていますが、地方から描いた地図もあっていいのではと思います。転入超過の広域自治体は、7/47しかありませんが、実質的には東京だけです。千葉、埼玉、神奈川（そして茨城）にある近郊都市は、転出超過地域のHubとなる可能性があるかと結論付けます。この地域が機能することで、都市と田舎という対立構造が、新たな方向性をもつのではないのでしょうか。